

2024.4.14 南板橋伝道所主日礼拝 『何を持って旅立つのか』 (ルカ伝9:1-17)
2024年4月14日 主日礼拝 復活節 第3主日 ギデオン協会員 (4名) 出席の礼拝

説教題: 「何を持って旅立つのか」 聖書箇所: ルカによる福音書9章1-17節 (121頁)

説教者: 秀島牧師 招詞: 讃美歌93 - 1 - 42 交読詩編: 第71編14 - 19節 (76頁)

讃美歌 : 83/327 (すべての民よ、よろこべ) /492 (み神をたたえる心こそは) /508 (救い主 イエスこそは) /27

「今週の聖句」〔(イエスは) 次のように言われた。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。」〕(ルカ伝9:3)

「牧師室の窓」 「渡されし 一冊の聖書 (ふみ) 人生の 道を照らせる 友となりしか」

「二度となき この人の世を 歩めるは この一冊の 聖書手にして」

(1) 皆様おはようございます。本日はギデオン協会の4名様にご出席されております。ようこそおいでくださいました。ありがとうございます。後程、ギデオン協会の尊い活動についてお話しして下さいます。扱て、きょうは復活節第3主日です。私たちは先々週の日曜日3月31日の復活日(イースター) 礼拝では、ルカによる福音書24章の中ほどに書かれている場面を学びました。それは、エマオ村への道を歩いて行く途中で、二人の弟子が復活されたイエス様と出会う場面でした。二人の弟子の「目が開けて、イエス様であると分かった」のでした。そして、先週の日曜日の礼拝では、ルカ福音書の最後の場面である24章の終わりの場面を学びました。イエス様は弟子たちの「心の目を開かれた」のでした。イエス様がメシア(油注がれた方) 即ち、救い主であることを証明したのでした。そもそも、ルカ伝福音書はイエス・キリストとは誰なのか、その方の「誕生から、天に上(あ)げられるまで」の一部始終を記しています。この様にルカ伝福音書の骨格を理解したうえで、本日は復活節以前に読んでおりましたルカ伝の連続講解説教に立ち帰ります。きょうはルカ伝の第9章に入ります。つまり、ルカ伝福音書とは何かを理解したうえで、下世話な言い方をしますと「ネタがバレ」ていることを承知してイエス様の足跡を辿ってゆきますと、理解がより深まって参ります。

(2) 本日の聖書箇所は9章の始めの箇所です。先程は司式者に9章第1節~17節までを朗読していただきました。文脈で区切ると17節までではなくて20節までです。やや長いので、朗読箇所を短縮させていただきました。この第9章の主題・テーマは何かといたしますと、それはルカ伝福音書全体のテーマがこの9章に凝縮されているのです。9節に記されている領主ヘロデ(もう少し正確に言えば、ヘロデ・アンティパスと言います。キリスト誕生の話を聞き不安を感じてベツレヘムの幼児を殺害したあのヘロデ大王の息子の一人です。) その領主ヘロデが9章9節で言っているように「(イエスとは) いったい、何者」なのか。そして、20節には「(9:20) イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」」このことは初代教会の「信仰告白その1」であると思います。それは「イエスとは何者なのか。イエスとは神の子です。」が信仰告白その1です。そしてもう一つ「信仰告白その2」があります。それは「神の子であるイエスが、何故この世に来られたのか。」です。新約聖書の中には4つの福

音書があります。イエス様の生前のお姿を、行動を、謂わば、日記帳の様に、或いは、思い出のスナップ写真集の様に綴られています。イエス様が人々との会話を通して、弟子たちとの行動を通して書かれています。福音書の読み手である私たちが、私たちの読み方によって、その時々の読み方によって、イエス様がこの世に來られたその意味を発見するのです。

聖書を繰り返し読むと言うことは、その都度に再確認をし、新しい発見をすることにあります。

私たちが聖書を読む、その都度に新鮮さを感じ、私たち自身が新しくされているのです。

(3) 前置きが長くなりましたが、本日の9章1節を見てみましょう。〔(9:1)イエスは十二人を呼び集め、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになった。〕イエス様に従ってきた12人の弟子たちを、一人前の伝道者にするために、謂わば、仮免許証を与えられ、9章からは実務訓練が始まるのです。9章13節を見てみましょう。5千人を遥かに超える人々に食べ物を与えるにはどうしたらよいのかと言う事例です。13節〔(9:13)しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買に行かないかぎり。」〕この問題に対して、弟子たちはその様なことは不可能ですと答えざるを得なかったのです。実際はどうであったのでしょうか。多分、おそらくは、確実に、そのようなことは実現できなかったでしょう。併し、でも、5千人以上の人々は17節に〔(9:17)すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。〕と書かれているように何らかの満足感を得られたのだと推測できます。このことを馬鹿々々しいと思うには勝手ですが、それでは何も得られずに、時間の浪費をしてしまうことになります。この9章が語り始めている主題・テーマは1節に書かれている通り「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになった」のです。つまり、現代風に読み替えれば、「悩みや苦しみに負けずに、人々を病気から立ち直る力を授けられた」のです。

(4) 3節にはその為の準備と言いますか、条件をイエス様は弟子たちに伝えています。それはどのような準備で、どのような条件でしょうか。〔(9:3)次のように言われた。「旅には何も持って行つてはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。」驚いてしまいますね。何も持つなと言っているのです。でも、でも、よく見るとそうではありません。

「何も持って行つてはならない」とは、物、物質を持って行つてはならないと、言っておられるのであります。つまり、イエス様は弟子たちに「よく考えなさい」と言っておられるのです。「よく考える」と言うことは、「覚悟を持ちなさい、工夫しなさい」と言う意味ではないでしょうか。…一寸脱線しますが、数日前に岸田首相がアメリカ合衆国の上院下院合同の議会で英語により演説をしました。その中で重要なことの1つに「相互理解を通じた平和には“覚悟”が必要です」と言っています。平和を維持するためにはお題目ではなく確実な相互理解が不可欠であると決心している、と言う文脈です。日本のある大手新聞はそのことには触れずに、演説内容を分析することもなく、議会演説に対してある一人の議員が拍手をしなかったことを記事にしたり、米国大

リーグ大谷選手の元通訳の詐欺事件の続々報を大きく取り上げています。取材力も分析力も将来を見通す判断力も乏しいと思われる好事例と感じました。人々に知らせるべき事柄を、筆を振るべき重要な場面を安っぽい三文記事にしてしまったのです。何故この場面の意義を読者に正確に伝えなかったのでしょうか。反論を唱える新聞人、新聞記者魂を持った社員はいなかったのでしょうか。その様なことは決してないと私は信じています。本日のこの9節の言葉は私には職業人としての精神、職業人魂を持つことの重要性を伝えている様に感じられます。皆様はどの様にお読みになられるでしょうか。

(5)3節にある「杖も袋もパンも金も持ってはならない」は厳しい言葉です。必需品も食べ物も生活資金も持つなどは、背水の陣で、背水の陣で福音を伝えなさいと言っておられるのです。私はこの3月で洗礼を受けまして51年になり、長い信徒時代には転勤族で各地の教会に属しました。多くの牧師に教えを受けましたその中に、お二人の牧師が背水の陣の方でした。私は、日本基督教団の年金局理事会の一員として、隠退された教職やご遺族に対して、今までに受けたご恩の万分の一でもお返しが出来ればと努めています。安土桃山時代に京都二条城で豊臣秀頼と徳川家康との会見（対面式）がありました。加藤清正は年若い秀頼に随行・補佐をして秀吉公から受けたご恩の万分の一でも報いたいとの思いを胸中に秘めて、背水の陣で臨みました。…加えまして、私は信徒時代に、ベンチャー企業に資本を投下する事業にも従事しました。お金を融資するのではなく、資本金への出資です。ベンチャー企業を立ち上げる人々は並々ならぬ覚悟が不可欠です。例えば、「死の影の谷」を越え「魔の川」を渡って行かねばなりません。背水の陣で生きている人々が、この世の中には少なからずいるのです。その人たちの中に、教会は背水の陣でキリスト教を宣べ伝えて行く責務があります。現在の日本のキリスト教は残念ながら部分的には、「見ざる、聞かざる、言わざるの三猿（さんえん）」と言われても過言ではないでしょう。…パレスチナのガザでの非戦闘員に対する大量殺害やウクライナでの無差別戦争殺害_よに対して無気力状態_{ひと}です。イエス・キリストはその様なお方ではありません。イエス様は私たちに「善きサマリア人」（ルカ伝10章）を示されました。為すべきことの信念を持ってなす、それがキリスト教の一端です。

6節には「〔(9:6)十二人は出かけて行き、村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした。〕ここに「至るところ」と書かれているように、「至るところ」とは、隈なく、一人も見過ごさないとの「決心と実行」が新しい時代を切り開く、と私は思います。

(6)7節のヘロデのことは先程お話ししました。権力者ヘロデの耳にまで伝わる程に弟子たちは懸命に神の国を宣べ伝え、人々の病気には親身に対応していたことが分かります。つまり、ヘロデが感想を述べるに至る程に客観的な評価がなされたのです。イエス様が弟子たちを訓練されたことの第1次評定結果がヘロデの感想によって分かりました。10節には「〔(9:10)使徒^{たち}は帰って来て、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。〕」と書かれています。つまり、活動の報告会を行なったのです。

ここには、弟子たちとは書かれておらずに「使徒たち」と書かれています。「使徒」とはギリシア語で「 $\alpha\pi\sigma\tau\omicron\lambda\omicron\varsigma$ アポストロス」と言いまして、その意味は、派遣された者、巡回して福音を宣べ伝えるキリストの使徒、です。序で乍ら、「使徒」という言葉が使われている回数は、マタイ伝では1回のみ、マルコ伝では2回のみ、ヨハネ伝では0回に対して、ルカ伝では11回使われています。ご参考として、使徒言行録には42回出てきます。

10節に記されている「ベトサイダという町」とはヨルダン川がガリラヤ湖に注ぎ込む岸辺の町です。イエス様が育ったナザレの村とは直線距離にして20数kmの位置にあります。このガリラヤ地方は北緯33度弱で日本の熊本市・長崎市とほぼ同じ緯度にあります。緑が豊かで、アーモンドの花が日本の桜と同じ時期3月から4月にかけて桜の花の様に一斉に咲きます。地中海を渡ってきた風がアーモンドのつぼみに優しく語りかけて花を咲かせるのでしょう。イエス様はこのガリラヤでお育ちになられたと思うと、厳しさの中にも優しさをお持ちになられていることが実感できます。桜の花もアーモンドの花も、いずれもバラ科の植物で、見た目には殆ど同じで、どちらがどちらと判別できない程です。目を閉じてガリラヤへの旅行を思い描いては如何でしょうか。

(7)今日の聖書箇所場面は、イエス様が弟子たちを訓練されている箇所です。人間には誰でも優れた素質があり、隠れた才能があります。それを正當に評価し、掘り起こし、育むことが、一人ひとりの人生をより豊かにすることになります。日本の社会では、徐々に人口が減少していく中で、個々人が生きる力を発揮することが、豊かな人生を育み、人々を思いやる社会を築くことになるでしょう。それが真の意味での生産力であり民力であり国力・社会力であると思います。

イエス様は、弟子たちや周囲の人たち、多くの人たちの心の中に語り掛けておられるのです。

私たちは人生の節目の時に「何も持って行つてはならない」との御声を聴いた時に、「何を持って旅立つのか」と自分自身に問い掛けて、人生の新たな一步を踏み出そうではありませんか。

・・・お祈りいたします。